

オラリオの霸王

朔夜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

シンドバッドの伝説…それは七つの精霊を従え、オラリオでの名声・富を己の欲しいがままにした男の物語。後に、それは英雄譚として語り継がれるが、男は英雄ではなく、王であつた。当時のオラリオの人々は彼を羨望と畏敬を持ち、こう呼んだ。

『オラリオの霸王』…と。

三度云うが、これは英雄譚ではない。1人の王の冒険譚である。

これから紡がれる物語は、そんな1人の男と、1つのファミリアの物語。

マギを知らなくても、読みやすいよう頑張ります…（ ;▽;）

目次

霸王、迷宮都市オラリオに辿り着く	1
霸王、ファミリアを結成する	5
霸王、眷族契約とステイタス更新をする	11
霸王、迷宮に挑む準備をする	18

霸王、迷宮都市オラリオに辿り着く

シンドバッドの伝説…それは七つの精霊を従え、オラリオでの名声・富を己の欲しいがままにした男の物語。後に、それは英雄譚として語り継がれるが、男は英雄ではなく、王であった。当時のオラリオの人々は彼を羨望と畏敬を持ち、こう呼んだ。

『オラリオの霸王』…と。

三度云うが、これは英雄譚ではない。1人の王の冒険譚である。

これから紡がれる物語は、そんな1人の男と、1つのファミリアの物語。

世界の中心地・英雄の都・冒険譚の創られる地・英雄が生まれる約束の地、様々な呼び名を持つ迷宮都市オラリオ。今日もこの地は、神・冒険者・住民・商人たちの熱気と活気に満ち溢れている。

メインストーリーを歩けば、果物・肉・骨董品を取り扱う商店の商人が己の商材を購入してもらうために発する客引きの声が騒音もしくはBGMとして聞こえてくる。ストーリーを行き交う者たちは、ヒューマン・エルフ・ドワーフ・小人族（パルウム）に多種多様の獣人族である。迷宮都市オラリオはダンジョンを起点として今日も活気づいている。

そんなオラリオの門前にて、新たに1人の男が挑戦しようとしている。

「ハハッ！これが、これが…迷宮都市オラリオ！英雄の都！新たな冒険譚が紡がれる都市！…待ち望み・あらゆる試練と道程・苦楽を乗り越えて辿り着いた地！これまでも、そしてこれからも、人も街も等しく同じ波…俺に越えられない波はない！」

周囲の人々を置き去りにし、ただ1人で高揚している、その男の名は「シンドバッド」。この物語の主人公である。周囲の人々は『あら、若いわねえ…』『俺も若い頃は…』『また田舎から…』『お母さん！新しい冒険者様だ！…』など様々な反応を見せる。

周囲の視線を全く気にしないシンドバッドは今後の方針を考えを巡らせる。

(…まずは情報収集だ。どこが適している？酒場？ギルド？…ファミリア探してもいいな、仲間探しも…)

「あぁっ！やりたいこと・やらなければならぬことが多すぎる！…でも、こんな楽しい波はなかなか味わえない！」

齢15歳の青年は、輝かしい未来と期待に胸を躍らせ、眩しいと錯覚するほど目を輝かせていた。

「あなたも、オラリオデビュー？」

シンドバッドに後ろから声をかける一人の少女。少女は真紅の髪を束ね、綺麗なポニーテールにしていた。

「そうだけど…これはこれは、見た目麗しき可憐な美少女。失礼ですが、麗しきあなたの名を伺っても？」

シンドバッドは、美少女・美女、大半の女性に優しくする…甘い性格であった。

いつものパターンでは、女性が恥じらいと謙虚さの反応をし、その反応を見てシンドバッドが更に楽しむ会話の流れであったが、この少女の場合は違った。

「100年に1人の麗しき美女だなんて…あなた見る目あるわね。

そうよ、私は真正正銘の美女よ！でも惜しいわ、1000年に1人の美女よ！

そして、私の名は、アリーゼ！アリーゼ・ローヴェルよ！よろしくね！」

「よ、よろしく。俺はシンドバッド。…って、あなたもってことは、君もオラリオデビューってことか。」

「アリーゼ：私のことはアリーゼって呼んで！そして、私もシンドバッドと同じデビュー組よ。」

綺麗な華が咲くかのような笑顔をしながら、少女は会話を続ける。

「わかった。アリーゼは、この後どこへ向かう予定なんだ？酒場？ギルド？」

「とあるファミリアよ！私は入りたいファミリアがあるの。昔から憧れている神様がいて、その方に入団を申し込もうと思っている。シンドバッドはどうするの？」

そのように話すアリーゼは、既に入団するファミリア決めているようであったので、シンドバッドは仲間に誘うのは無理だと諦めた。初めて会話をした相手ということもあり、運命的な出会いであるとも感じていたが。

「そうなのか、俺はとりあえず情報収集のために酒場とギルドに行くと思う」

「そしたら、ここから先は別々の道ね。あなたの健闘とワクワクするような冒険を祈っているわ」

「ああ。今度会ったときは、俺もアリーゼの冒険譚を聞きたい。お互いの冒険譚で夜通し飲み明かそう」

そのあと、一言二言交わし、2人はそれぞれの道を進んだ。

1人は、心に決めた神様の下へ。1人はギルドの下へと。

女性経験豊富なシンドバッドでも若干引くほどの反応をした女性。アリーゼ・ローヴェル。この女性とシンドバッドの出会いが、オラリオにどのような化学反応を見せるのかは未だわからない。

霸王、ファミアリアを結成する

シンドバッドとアリーゼが運命の出会いと別れをした翌日の朝、シンドバッドは迷宮都市オラリオのメインストリートから1つ外れた裏路地の教会で、健やかに寝ていた。しばらくすると、朝市の時間帯になり、メインストリートが次第に活気を帯びていく。その活気は裏路地の教会内にも聞こえ始める。

ガンガンと激しい頭痛と騒音、そして教会のステンドグラスから差し込む眩しい朝陽によって無理矢理に眠りから起こされる。

「…痛てて、頭がカチ割れそうだ。たしか昨日は酒場で出会ったドワーフたちと意気投合して飲み明かして…」

あのドワーフたち、「これがオラリオの洗礼だ」とか言つて、秘蔵のドワーフの火酒を七樽開けたところまでは覚えているんだが…次、酒盛りする時は覚えとけよ。絶対に負かしてみせる。オラリオへの旅路では、酒豪、蟒蛇などの二つ名を欲しいがままにしていたシンドバッドにとって昨夜の出来事は悔恨が残った。

さらに昨夜の酒場での記憶を掘り起こそうとするが、激しい頭痛に苛まれ、それどころではなく記憶を思い出すのを諦める。

「もう酒は飲まない。特にドワーフとは。」

二日酔い時の定番の言葉を吐きながら、一週間以内に破られるであろう約束を己に課す。昨夜の記憶は曖昧になっているが、昨日のギルド内での記憶は覚えているため、思い返す。

昨日はアリーゼと別れた後、ギルドへ向かった。ギルド所属の受付嬢からは2つの提案をされた。

- ① 自分自身でファミアリアに売り込みをかけ、入団すること
- ② ギルドに団員募集をかけているファミアリアに入団の志願をする

こと

結果として、俺は①を選んだ。というのも、②のギルド内で募集されているファミリアに運命を感じなかったからだ。

最後に受付嬢から、ファミリアに所属し冒険者になったとしても必ず冒険はするなど忠告を受けたが、なつてもいないので軽く流しておいた。

ギルドを訪れた後、最大手と説明されたゼウスファミリアとヘラファミリアを訪れたが、門番に門前払いをされた。その流れでヤケクソもこめて酒場に入り、今に至る。

そのため、ギルドでは満足できるほどの情報を得ることが出来ず、酒場では言わずもがなだ。

「さて、今日は何をしようか…やっぱり、ファミリアさが「キャー！変態！」

今日の予定を考えていると、教会の入り口から女性の悲鳴が聞こえた。女性の悲鳴とあらば、東西南北どこへでも駆けつけて助けるのがモットーのため、シンドバッドは二日酔いの身体に鞭を打ち駆け出した。

「…お嬢さん、もう大丈夫だ！俺が助けに来た！…こんな聖なる場所で朝から不貞を行う罪人はどこだ！俺が相手をしよう」

シンドバッドは教会の入り口に着き、悲鳴声の主を探す。

周囲を警戒しながら対象の人物を探していると、視界の端から特徴的な真紅の髪と剣筋が見えた。しかし、その剣は己に向けられており、意表を突かれたシンドバッドは無理な姿勢を取りながら、躲す。

「てんちゅうー…あなたが聖なる教会の朝にてシスターと我が主神を辱めた変態なのね！私が来たからにはもう好きにはさせないわ、我が主神に誓って。いぎ、せーいばーい！」

シンドバッドは己に向けられた連続の剣戟を躲していく。
シンドバッドの視界の先には、昨日互いの未来と希望と再会を誓い
合った少女がいた。

「あ、アリーゼ！俺だ、シンドバッドだ。なぜ俺に剣を向ける！やめてくれ、今は悲鳴を、変態に襲われている女性を助けなければいけないんだ」

「知っているわ！だからこそ、私は…シスターの悲鳴の原因である変態であるシンドバッドを断罪せねばならないわ！シンドバッド、あなたとは…高め合えると競い合えると思っていたのに…：劇的な再会でも、こんな再会になるなんて！」

「だから、剣を向けられる身に覚えがない。冤罪だ！俺は助けに来たんだ！変態は他にいる！」

自身の冤罪をアリーゼに訴えかけるが、アリーゼの剣は止まることはない。それどころか、剣筋は更に鋭く、更に多彩になっていく。

「シンドバッド、一体なにを言っているの！自分の姿を見てもなさいー！」

アリーゼの忠告を聞き、シンドバッドは自身の姿を確認する。
なんと、自身の身には装飾品・服・荷物入れ等全て無くなっており、身に着けているのは股関節を隠している大葉のみであった。

シンドバッドは頭が真っ白になりかけるが、多彩な剣筋が自身に向けられている以上、思考を加速させる。そして、再度自身の服装を注視する。シンドバッドは状況を整理でき、アリーゼの説得を試みる。

「こ、これは違うんだ、アリーゼ！一度落ち着いて釈明させてくれ。」

この姿は女性を襲うためにしているわけではないんだ、他意はない。こんな姿で説得力はないかもしれないが、数少ない俺の尊厳に誓って襲う気など毛頭なかった」

アリーゼに釈明の機会を訴えかけるが、アリーゼの猛攻は止まらない。

そんな絶体絶命のシンドバッドに救いの声、救いの手を差し伸べる1人の女神がいた。

「アリーゼ。剣を収めなさい。この男の子、嘘は言っていないわ。そして、あなたはまだ私の眷族にはなっていないじゃないの。」

「え〜っ！アストレア様！既に、私の心はあなたの眷族です。そしてシンドバッド、あなた、その大葉1枚の類いまれなる性癖の姿を晒して、本当に襲う気がなかったのね。……や、やっぱりね。わ、私はシンドバッドのことを最後まで信じていたわよ。あなたはそんなことしないって。」

「自称、真紅の美少女剣士アリーゼの猛攻は、1人の女神によって止められ。シンドバッドは己の尊厳と威厳を少しだが保つことが出来た。」

「ふーっ。た、たすかった…女神様、ありがとうございます。あなたののおかげで我が人生を終えることはな…!!」

麗しき女神アストレア様。不肖、私シンドバッドはあなた様に仕えるために、全てを捧げるために、このオラリオの地に導かれたようです。そう、これは運命。そうに違いない。昨日の屈辱も昨夜の過ち

も、今この時のための前座。ぜひ、私をあなた様の眷族にさせてください。必ずや、あなた様の絶対無敵の楯となり、無敗の矛となりましょう。かの三大クエストのベヒーモス・リヴァイアサン・黒竜、全ての敵を屠ってみせましょう。」

「い、いや。アリーゼもそうだけど、まだ私ファミリアもないのだけれど…今日だって教会の孤児院の炊き出しに来ただけだし…」

「ならば、今ここで創りましょう。アストレア様と俺の冒険譚の始まりを。永遠に語り継がれる神話譚の始まりを。」

シンドバッドはそう決め台詞を述べて、女神アストレアの前に跪き、女神の御手に誓いの口付けをかわした。

「い、いや、シンドバッド。あなた、なんて格好でアストレア様の御手に口付けをしているのよ。そ、それに私が先に眷族の願いを伝えたのだけれど…!」

アリーゼの言うとおり、シンドバッドは全裸に近い姿で、女神アストレアの前に跪き、女神の御手に口付けをしていた。その様子は、神話をモチーフにした絵画のようでもあった。…只の全裸の変態男が女性の手口付けをしているともみられるが。

それが、将来「オラリオの霸王」と名を馳せるシンドバッドと正義の女神アストレアの出会いであった。また、「オラリオの正義の砦」として名を馳せるアストレアファミリアの誕生であった。そして、これが痴態とファミリアの恥という理由から語り継がれることのないアストレアファミリアの誕生の秘話であった。

…その後、シンドバッドはアリーゼとアストレアの誤解を解くため、大葉1枚の姿になった経緯と、現状一文無し、宿無しの説明をした。誤解は無事解くことが出来たが、場所と恰好が社会的に良くない為、アストレアファミリアの一行はアリーゼの宿に向かった。

「いや、その…私はファミリアもホームもないのだけれど

…え、本当に眷族になるの？今日ファミリア結成するの？」

こうして、零細ファミリアであるアストレアファミリアは2人？の眷族によって、女神の意思関係なく結成されたのであった。

霸王、眷族契約とステイタス更新をする

アリーゼが十数分の部屋の掃除を完了させ、今、俺はアリーゼの部屋の前で待っている。理由は、アリーゼの眷族契約の為だ。契約とステイタス更新のためには裸となり、背中を見せなければならぬ為、締め出されているというわけだ。

待つこと、15分前後。甲高く、耳障りな笑いと言面々の笑みを浮かべて、アリーゼは部屋から出てきた。

「ふふふ、シンドバッド、次はあなたの番よ！まあ、神にすら愛された私のステイタスには勝てないでしょうけどね！…ちなみに私はスキルが発現してたわ。これもあれも、私のアストレア様への忠愛とアストレアからの寵愛による相思相愛が成せる業よね。ああ！私はなんて罪深い眷族なのかしら！」

余程、ステイタスの内容が良かったのか。アリーゼは気分が高揚し、興奮しているのが言葉の節々からわかる。加えて、アリーゼは俺に向けて自身のステイタスが書き写された羊皮紙をこれでもかというほどに見せびらかしてくる。

そんな絶賛興奮中のアリーゼの後ろから、軽いチョップが飛んでくる。

「アストレア・チョップ！…こちら！アリーゼ。ステイタスの内容はファミリア内でも極秘事項なの。こんな声の通る所で、大声でいうものはありません。それにステイタスの用紙まで見せてしまつて！次からはダメですよ。メツ！」

「い、いったーい！ですけど、わかりました！私はえらい子なので、次からは気をつけます！えっへん！」

そういい、アリーゼはアストレアに抱き着く。アストレアは我が子の楽しそうな姿に苦笑いしながらも、嬉しそうな笑みを浮かべる。

「わかればよろしいです。くれぐれも今後はステイタスの取り扱いに細心の注意を払ってくださいね。」

アストレア様がアリーゼに注意を促している様子を見界に入れないが、俺はアリーゼのステイタスが書き写された羊皮紙に目を向ける。気になつていなかったといえ、嘘になるため、じっくりと見させてもらう。

アリーゼ・ローヴェル

L v. 1

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

《魔法》

《スキル》

【正華紅咲】

・正義への想いにより、任意発動。

・正義への想いにより、戦闘時にて全能力高補正・戦闘後に成長補正。

・正義への想いの丈により効果向上。

その羊皮紙には、確かにスキルの発現とその内容が見て取れる。このスキルは珍しいのだろうか。俺には他と比較する程の情報を持ち合わせてはいない為、正直凄さがわからない。

「ふむ、ステイタスの話は色々な人から聞いてはいたが、このような表記で表されるのか。それでは、アストレア様、俺の眷族契約とステイタスもよろしくお願いします。」

「予め言っておくけれど、契約したばかりでスキル・魔法の類いが発現することは極めて稀よ。もし出なかったとしても、落胆する事ではないわ。」

「はい。わかっていますとも。でもアストレア様、俺、なんとなくスキルか魔法が出る気がするんです。俺を何かが呼んでいる。そんな感じですよ。」

他人からしたら、「何をいつているんだ？」と心配されてもおかしくない言葉を言っている自覚はある。が、アストレア様は俺が嘘を言っていないことがわかるのだろう。俺の眼を一瞥したのち、眷族契約とステイタス更新の準備に取り掛かった。

俺も上着を脱いで畳んだ後、昨夜アリーゼが寝たであろうベッドにダイブする。ベッドからほのかに香る匂いに、アリーゼが乙女であることを思い出し、感心する。

「シンドバッド、後でアリーゼに殴られても知りませんよ。」

「いえす、まむ。二度とクンカクンカはしません。」

「…まったく。シンドバッド、それじゃあ眷族契約とステイタス更新を始めるわね。」



——ガチャリ。

眷族契約の儀式とステイタス更新が終わり、アストレアとシンドバッドが部屋から出てくる。部屋の前で待っていたアリーゼは、シンドバッドのステイタスが気になってしかたないのか、満面の笑みを浮かべながら話しかけてくる。

「シンドバッド！ステイタスはどうだった!?何か発現した？」

「……アリーゼ」

「どうしたのよシンドバッド、悩んでいるような暗い顔して！」

「アリーゼが見せてくれたから、俺のも見せるが、ステイタスの内容に関しては他言無用で頼む。」

「アリーゼ、私からもお願い。」

「え、えっ…!?わ、わかりました…アストレア様まで、一体絶対どうしたってのよ」

アリーゼはアストレアとシンドバッドの深刻な面持ちに萎縮してしまう。アストレア自身の時は、契約時に貴重なスキルを発現した為、これからの未来と活躍を想像し高ぶりを抑えられていなかった。また、アストレアも嬉しそうな笑みを浮かべて喜んでいた。

しかし、シンドバッドとアストレアの様子を見るに何が起こったのか想像できなかった。アリーゼは考えを巡らす、考えてもわからなかったため、シンドバッドが渡してくれた羊皮紙をみる。

「……は？一体なによ。この馬鹿げた内容」

シンドバッド

Lv. 1

力：10

耐久：10

器用：10

敏捷：10

魔力：10

《魔法》

【バアル】

・精霊魔法

・雷属性

・詠唱式【憤怒と英傑の精霊よ、汝の力を示せ】

《スキル》

【七海霸王】

・全アビリティ高補正・高成長補正。

・富・名声の丈に比例して、効果上昇。

【精霊寵愛】

・精霊魔法のみ魔法所有数の限界突破。

・詠唱量の増減により、強化補正増大。

【精霊魔装】

・ 契約した精霊の力を己に顕現する実行権付与。

「スキル2つに加えて、魔法も?……どうということ?……ア、アストレア様これは一体……初めてのステイタス更新でこんなことって」

シンドバッドのステイタスの内容が記載されている羊皮紙を見て、その内容にアリーゼは絶句する。

アリーゼは現実が受け止めきれずに、アストレアに助けを求めようと目を向ける。

「ごめんなさいアリーゼ。私もどういふことかわからないの。この信じ難い現実が受け入れれないのは私も同じなの……とりあえず、ここではなんだから、部屋の中に入って話し会いましょう」

「は、はいアストレア様。って、なんでずっと黙っているのよ、シンドバッド。はやく中に入るわよ。」

アリーゼは最初から今まで、深刻な面をしているシンドバッドに声をかけるが、シンドバッドは上の空で反応が薄い。

「しゃっきとしなさい!シンドバッド!……ほら、とりあえず中に入りなさいって!」

「お、おう」

俺はアリーゼに手を取られて、3人でアリーゼの部屋に入った。

その後、3人でステイタスの再確認と今後の方針に関して、話し合った。

俺は終始黙っていて、アリーゼとアストレア様で話し合っていたよ

うなものであったが。

霸王、迷宮に挑む準備をする

眷族契約とステータス更新を無事に終え、今後のファミリアの方針が決まった俺・アリーゼ・アストレア様は冒険者ギルドに訪れた。ざっくりと立てた、アストレアファミリアの方針は下記の3つである。

- 1つ目は、ギルドでの諸々の手続き
- 2つ目は、装備品の購入
- 3つ目は、ダンジョン探索

そして今回、俺らがギルドを訪れた目的は「ファミリア結成の申請」と「オラリオ全体の概要説明」だ。そのため、アリーゼの他に、女神アストレアも同伴しているというわけである。

「シンドバッド、アストレア様、ちよーと待っててね！ええーつと…」
ギルドに入って早々に、アリーゼはあたりを見渡し、だれかを探し始める。

「あつ、居た！…ネーゼ！」

アリーゼがネーゼと呼ぶ先には、ギルドの制服に身を包んだ灰色髪の女獣人がいた。

「ん…どなたか呼ばれましたか？」

…アリーゼですか！アストレア様を無事見つけることはできましたか？」

「うん！無事見つけて、眷族になることができたの！その節は大変お世話になりました。…本当にありがとう！」

「それは良かったです。それで、本日はどうされましたか？」

「今日は、新生アストレアファミリアの全員でファミリア申請とオラリオ全体の説明を聞きにきたの！」

「かしこまりました。そうしましたら、会議室にご案内致しますので、こちらにどうぞ」

アリーゼがネーゼと呼ぶ獣人族の受付嬢は、俺とアストレア様を目を向け会釈をした後、会議室の一室に案内してくれた。その後、会議室にてネーゼさんにファミリアの登録してもらい、オラリオ全体・冒険者システム等の説明を受けた。



「以上をもちまして、説明自体は終わりになります。オラリオには、冒険や食など素晴らしい文化もありますが、一方で闇派閥・闇市・奴隷売買等の黒い文化も根強く存在します。くれぐれも！これらの団体には気を付けて過ごして下さい。特にアリーゼさんは素直で正直者ですので細心の注意を払ってくださいね！」

「はい！私にまかせてください！もう私がいれば安心です！」

ネーゼさんは、最後に真剣な眼差しで俺たちに忠告をしてくれたが、アリーゼは聞いているのか、聞いていないのか、不安しかない返答をしていた。

（あ、アストレア様苦笑いしてる。それに、ネーゼさんも少し頭抱えてる。）

「……はあ、私からは以上です。伝えたいことやお得な情報などは簡易的にはなりますが言い切りましたので、何も言うことはありません。アリーゼさんはともかく、アストレア様・シンドバッドさんは何かご質問等がありますか？」

ネーゼさんは、説明をしてくれた1時間で心労が溜まっているようにも見える。

「ネーゼさんの説明が完璧でしたから、私からは特にないわ。シンドバッドは何かあるかしら？」

「もちろんですとも。最初から聞きたいことがありました。……ネーゼさん、

今夜、ご夕食でもいかがですか？

もしよければ、朝までオラリオとネーゼさんについて語り明かしましょう。いっそのこと、アストレアファミリアに加入しませんか？俺、ネーゼさんと初めてお会いした時から、運命を感じていて「ふんっ！」

運命の受付嬢ネーゼさんを口説いていたが、後ろからアリーの鉄拳が飛んできた。この女の前だと麗しき女性を口説くこともできない。ほら見ろ、ネーゼさんも驚いて苦笑いしてるぞ。

「シンドバッド：あんた、今夜の宿代すら無い無一文でしょ。どうやって『お食事』するのよ。言っとくけど、その『お食事』代は貸さないわよ。それにネーゼさんはギルドの人！まったく…」

「もちろん、今から富と名声が集まる迷宮（ダンジョン）で稼ぐ！というか、そういう場所だろう！このオラリオは！」

「…シンドバッド、武器すら無い状態で何言ってるのよ。さっさと装備買いに行くわよ。日が暮れる前には、ダンジョンに潜って1・2階層で様子見したいんだから。」

ああー！早くダンジョンに行ってみたい！すぐくワクワクしてきちゃった！

「ふふふつ。ようこそ、冒険者の道へ。このネーゼ、ギルドの一員として、アストレアファミリアと眷族様方の？栄と栄光を切に願っております。」

「ネーゼさん、必ずやアストレアファミリアの名を、このシンドバッドの名を轟かせてみせましょう。その時は、是非お食事をともに」

「ふふつ、わかりました。その際は、ぜひお食事のお誘いお待ちしております。また、日々ここで、みなさまをお待ちしておりますので、元気なお顔を見せてください。…もちろん、アリーの皆さまもアストレアさまですよ！ふふふつ。」

「はい！ネーゼさん！この馬鹿シンドバッドも一緒にまた来ます。」

「ありがとう、かわいい受付嬢さん。この子達のことお願いね。それ

と、ダンジョンに入る前に装備を揃える予定なのだけれど、初心者用に丁度いい装備を売ってる場所知らないかしら？」

「そうですね・ギルドの一受付嬢としては、初心者用の装備をギルド支給品としてお貸しする事を提案しますが、私個人としては、バベルにて取引されているヘファイストス・ファミリアの新人作品を強くお勧めします。稀に掘り出し物もあると聞いております。」

「どうもありがとう、かわいい受付嬢さん。装備を使うのはこの子達だから、どちらを選ぶのかはこの子達に任せるわ」

「ネーゼ、貴重な情報ありがとう！自分の命を任せる装備だから、自分で選択して購入するわ！なので…さっそくバベルに向かいましょう2人とも！早く迷宮（ダンジョン）で冒険したい！」

アリーゼはダンジョンに早く潜って、モンスターと戦闘したいのだろう。ワクワクが止まらず、催促してくる。まあ、俺も自分のステータスを確かめたいし、自分の力がどれくらいオラリオに通用するのかは気になる。…それに説明を聞いているうちに、俺も冒険心がくすぐられ、高揚感が高まっている。

そんなこんなで、獣耳が可愛く綺麗な受付嬢ネーゼさんによる素晴らしい説明とギルド登録、装備の情報を手に入れた俺たちは、来訪対応専用のギルド会議室を出て、バベルに向かった。



俺たちはネーゼさんに提案してもらったバベル三階にある「ヘファイストス・ファミリア」の売店に来ていた。

売店のショーケースには、一目で高価とわかる装備・業物が陳列されている。中には、直剣、曲剣、ショートナイフ、二槍、戦斧、全身鎧や片手盾等も数多く存在していた。これらの装備の全てに、主神ヘファイストスの名が刻まれている。これらは名を刻むに相応しい武器であった。全てが一千万ヴァリスを超えており、中には億に届きうる装備もある。新生ファミリアには手が出ない装備ばかりだ。

「ちよつとちよつと！たかすぎでしょ！」

「アリーゼ、そつちじゃない。さては、ネーゼさんの話聞いてなかったろ。俺らが見に来たのはこっち。」

武器の品質は最低限、一階層から五階層まで通用するが、六階層からは厳しくなっていく。すぐに折れてしまう物に命をかけたくはない。使い手の技量もあるけれど、しっかりとした装備は欲しい。

そう考えるとギルド支給の物はちよつと危ない。安価で手に入りやすいけれど、それだけだ。胸のプレートとナイフ、剣もある。オラリオ外での冒険ならまだしも、ダンジョンでの冒険に最低限の品質はちよつと怖いというのが本音だ。

「シンドバッド、予算は30000ヴァリスまで。それ以上は出さないわよ」

「えっ？アリーゼ、そんなに貸してくれるのか？…ってきり、そこらへんの安物になるんだと…」

「ギルドで言ったでしょ。装備は自分の命を預けるものって…それに安物を買って、すぐ壊れるぐらいなら良い装備、もしくは自分で納得する装備を決めたほうが良いでしょ。まあ、金欠だから予算制限はあるけどね」

「アリーゼ、本当にありがとう。本来であれば、主神である私が出資すべきなのでしょう…」

「アストレア様、大丈夫ですよ！常日頃、孤児院の子供達やスラムの少女の為に炊き出しをされているのは知っていますし、そういうところが大好きなんです！…それに！すぐにも私とシンドバッドがダンジョンで荒稼ぎしてきますので、どかーんと待っていて下さい！」

「ア、アリーゼ…」

「そうですよ。アストレア様はどかーんと待っていてください。すぐにも、俺とアリーゼが一攫千金のお宝を見つけ出して、楽な暮らしをさせてみせますから。アリーゼも…すぐにこの借りとお金は返す。

そして、ついたみたいだぜ。愛しのネーゼ嬢、お勧めのヘアアイス

トスファミアの新人鍛冶師の売店に！」

ギルド内と移動するための昇降機が上がり、ガシャンと開く音が聞こえ、目的の「ヘファイストス・ファミア」の新人製作者の作品階層に辿り着く。

その階に広がるのは剥き出しの石レンガ造りのフロア。先程の明るい階層よりかは、若干薄暗い。しかし、冒険者だろうか、下の階層より活発な人の声が響いている。



「え……うそ」

「や、やすい……」

「シンドバッド、アリーゼ。こ、これは、大丈夫なのかしら？値段が控えめということもあって、逆に心配になってくるわ」

俺らが眺める先には、「ヘファイストス・ファミア」の新人の作品が入った木箱。

その木箱の上の値札には「長直剣 各4000ヴアリス」と書かれ、10本ほどの剣が無造作に入っていた。

「アストレア様……おそらく大丈夫ですよ！ネーゼが言うには、自分の新顧客の伝手を増やすためにも安価にしているそうですし、ちゃんと……ほら！剣に製作者の名が銘記されていますし！」

アリーゼが手に取ったのは、短剣。やや小さめでありながらも丁寧に造られている。そして、刀身の一部に新人であろう名が銘記されているが……

結局、俺らは30分以上、数多くの装備の中から納得のいく武器を探していた。

「シンドバッド……一体どれがいいんだろうね。なにかピンと来たりす

る作品ある?」

「今のところはないかな。それに、こうも多く無造作に置かれていると…見つけ出すのだけでも一苦労だ」

アリーゼから借りれる予算は、30000ヴァリス。全身装備は値段的に厳しいだろう。

それなら、狙いどころの装備は何だ? 現在、アリーゼは直剣を装備している。ここで、俺が片手楯を購入し、タンクの役目を担うこともできる。

自分の装備について考えていると、ふと愛しのネーゼ嬢の言葉を思い出す。

(そこは鍛冶士の中でも駆け出しだったり、「ヘファイストス・ファミアリア」で鍛冶の発展アビリティがない人が創り上げた装備が多いらしいの。主神の名を刻めない製作者達が創り上げた装備が此処に売りに出されてるということを聞くわ…)

——ピッピッピッピッピ

ん? 今、すぐ近くで1羽の鳥のような光る何かが。通り過ぎたような。

こんな薄暗い建物内で、光る鳥なんて…錯覚か?

光る小鳥? をもう一度探すためにあたりを見渡すと…いた!

誘われてか、導かれてなのか、光る小鳥はどんどん奥に進んでいく。俺もそれを追いかけて、床に無造作に置かれている木箱を避けながら奥に進んでいく。

そして、ようやく光る小鳥は一つの木箱の所に止まり、俺も追いつくことができた。

「ようやく追いついた! これは…やっぱり、光輝く小鳥か? それにし

ては小さすぎるような…

「おい！アリーゼ！あの戸棚の最上段に陳列されている木箱の側に、光る何かがないか？」

入口手前側で、装備を探していたアリーゼを呼ぶ。

そして、アリーゼは木箱を避けながら、こちらに向かってきた。

「はあ？シンドバッド、あんた何言ってるの？なにもいないわよ。それ！よ！り！も！ちやくんと真剣に装備を選んでくれないかしら！」

「ちゃんと探してるって！ほら！あそこ見てみろよ！」

あ、あれ？いなくなってる…」

アリーゼに遅れて、アストレア様もこっちにきた。

「アリーゼ、シンドバッドどうしたのかしら？ピンとくる装備でも見つかった？」

「アストレア様もこいつに注意してください！こいつ、いきなり『光る何か』とかよくわからないこと言ってる、自分の装備を碌に探してもしてなかったんですよ！」

アリーゼがアストレア様に文句を言っている間に、俺は光る小鳥が止まった最上段に陳列されている木箱に手を伸ばす。

「ん…う…これは、」

手に取った木箱は埃被っていて、中には1本の剣が入っていた。

柄は、青色でシンプルな無駄のないデザイン。刀身は、細身の半曲刃。

重量は比較的軽めで、片手剣として扱うことが可能だ。

「あらシンドバッド、それシャムシルじゃない。別名『湾曲刀』ね。

値段は…27000ヴァリス！これを買ったら、身を護る防具が

買えないわね。」

「アリーゼ、俺これにするよ。名前は『コルブランド』？製作者は……椿・コルブランド。」

あ、刀身に【我が最初の剣を汝に託す】って書いてある。…俺もお前に命を託すぜ！よろしくな、相棒！」

「え！身を護る防具はどうするのよ！…迷宮で死ぬ気？」

「攻撃は躲すなり、どうにかするさ。それに『ピン』と来たんだ。この剣が俺を呼んでいた。そんな気がする。」

最初アリーゼは難色を示していたが、俺の頑固で真剣な目をみて諦めたようだ。

「わかったわよ。基本、私が盾役をするわ。スキが生まれた時の攻撃は任せたわよ」

アリーゼの承諾も取れたことだし、再度刀身をじっくり見る。

この剣、めちやくちやいい装備だ。剣の重心がわかりやすく、正直者ってイメージを抱く。製作者は余程の正直者か素直な人なんだろうな。

アリーゼと相談した結果、残りの3000ヴァリスで予備用の数本のナイフを購入した。

アリーゼには感謝しかない…必ずこの恩は何倍にしても返そう。



そして俺らは、「ヘファイストス・ファミリア」の売店を後にし、迷宮の入口前の広場に来ていた。

今日最後の目標である。迷宮探索だ。階層は1階層。危険な行為は一切行わない。自分たちの技術が迷宮にどれくらい通用するのかの小手調べだ。あとは、アリーゼと俺のコンビネーション合わせでもある。

もちろん、女神であるアストレア様はここでお別れだ。

「アリーゼ、シンドバッド。はい、これ」

アストレア様の両手には、銀製で中央に魔石が埋め込まれた腕輪が3つ、魔石を入れる革袋があった。

「……う？これ……腕輪ですか？」

「そう、これは主神である私からのプレゼント。お手軽だったし、せつかくの機会だから買ったのよ。みんなでお揃いよ☆」

「えっ？いや、悪いですよそんな……」

「違うのよアリーゼ、これは自己満足、願掛けね。」

私は自分の家族であるあなた達が無事に帰ってきてほしいのよ。そんな願いを込めたアクセサリー。」

そういうアストレア様は、どこか寂しげな表情を浮かべていた。

もしかしたら、友人の神とそのファミリアの話でも聞いてしまったのかもしれない。

「それにシンドバッド。あなたには、追加でこれを渡すわ！」

アストレア様は腰に隠したものを取り出す。

「アストレア様、これは籠手ですか？」

「ふふふ、そうよ！盾は値が張っちゃったから、より安価で簡易的な造りだけど籠手。何かあったら、これで少しでも身を護って。」

「ありがとうございます。そして、必ず無事に帰ってきますよ！一攫千金の財宝でも手に入れて、今夜はみんなで祝勝宴でもしましょう！」

「そうね、シンドバッド！こうなったら、一攫千金なら一攫万金よ！」

アストレア様にワイン付きのフルコースを堪能してもらおうよ！」

「ありがとう2人とも、本当に無事に帰ってきてね。」

「はい！」

アストレア様の言葉に元気よく返事した後、周囲からクスリと笑い声が聞こえた。

そりゃ、こんな大広場でこんなことをすれば、笑われもするか。

笑いたいやつは笑わせておけ…俺らは必ず、無事にアストレア様の下に帰ってきて…そして、宴をする。それだけだ。

不完全ではあるが装備も整った。

運命を感じた武器もある。

今から俺たちの冒険が始まる。

そう考えると、自然と胸が高鳴っていた。

「いこう（いくわよ）！アリーゼ（シンドバッド）！」